

令和6年12月14日（土）メゾの会 研修会報告

宮古圏域医療連携実務者ネットワーク（通称：メゾの会）による研修会が宮古山口病院 プライムホールにて実施しましたのでご報告いたします。宮古圏域による5病院のMSW およびPSWの役員が中心となり企画し、当日は当会OBを含めて19名の参加がありました。

当会における研修会は2019年3月の研修会を最後に、コロナ禍や諸事情により開催が長期にわたって見送りとなっていたことを踏まえ研修会の冒頭にて会の目的について、三陸病院の芳賀（PSW）より説明がありました。

この会は、ソーシャルワーカー、各医療機関の相談担当者等や支援者同士の顔が見えないのに、安心して患者さんを紹介できないのではないかと～顔の見える関係づくり”を契機に、「患者さん自身の安心の為」「国や社会情勢～マクロ」「対人援助等～ミクロ」だけでなく、「地域や関係機関同士のつながり～メゾ」の視点を持っていこうとの目的で、宮古圏域におけるMSW、PSWや連携実務に関わる看護師や事務員を対象に、情報共有の場や研修の場を設けていく為、通称メゾの会として2015年8月に発足しました。

今日の研修のテーマは「身寄りのない人の支援を考える」をテーマで、12月7日に盛岡市にて実施した「岩手県医療ソーシャルワーカー協会研修会～身元保証問題とソーシャルワーク」の概要報告を経て、事例報告として、岩泉病院の中嶋（MSW）より『家族と疎遠となり協力が得られない中で、重層支援を活用し関係機関と連携・連動して支援したケース」、宮古山口病院の藤岡（PSW）から「身元引受人が途中でその役割を辞退してしまったケース」について、それぞれ一般病院と精神科の立場から対応したソーシャルワークについて報告しました。参加者から「重層支援を絡めて、行政と共同した退院支援調整のケースについて聞いて、行政への働きかけなど他職種で関わっていく必要性について再認識した。宮古市では重層型支援体制事業の機能は不十分である為、岩泉町と同じように対応するのは難しいかもしれないが、今後の社会情勢を注視していきたい」「精神科における、ご本人とその周りの心理社会的問題への介入についての実際（ソーシャルワーク）を聞いて、大変勉強になったし、共感することが多くあった」等の声が聞かれました。

グループワークでは、事例報告を振り返りながら、互いの困りごと等について共有した上で、「ソーシャルワーカーや支援者が1人で抱え込まないで対応していくこと」「地域で孤立している人等は関係機関との連携の下で事前に分かっておくようなシステムづくりが必要」「行政への働きかけや連携の方法を探る」等の課題等整理されました。

当会が約5年ぶりに開催されたことに伴い、この会を立ち上げた当事者でもある湯澤氏（当時：宮古病院MSW、現職：岩手県総合福祉センター 児童担当）と平野氏（当時：宮古山口病院、青森県つくしが丘病院PSW）に遠路はるばる駆けつけていただきました。平野氏より「このような会がそれぞれの地域に当たり前にある訳ではない、ぜひ青森に来ていただいてこういった取り組みを発信してもらえればありがたい」湯澤氏「行政の立場か

からお伝えすると、例えば予算を組んで実施することは現時点で令和7年度分は決まっている。これから検討いくとしても令和8年度からどうするかの話になる。ソーシャルアクションとしてキーになっていくのは行政の他には議員とのつながり等が必要。こうして、継続していっているのが本当にありがたい」等のあたたかい声をいただきました。

当日の運営に関わってくれた役員、駆けつけてくれたOB、そして研修会に参加してくださった皆様に心より感謝申し上げます。

次回は来年の春頃に講師を招聘した想定での研修会を企画、また新年度新任者を想定した歓迎会を実施していく予定です。

文責 済生会岩泉病院 中嶋 亮三